

音楽への関与の深さは音楽の捉え方にどう影響するか？ How does the depth of your involvement in music affect how you perceive music?

田中 吉史[†], 高村 茉莉[†]
Yoshifumi Tanaka, Mari Takamura

[†]金沢工業大学心理科学科
Kanazawa Institute of Technology
tanakay@neptune.kanazawa-it.ac.jp

概要

音楽に対する態度や音楽に関する行動が、音楽への関与の深化に伴ってどのように変化するかを、音楽への関与度が様々な10人に対するインタビューを通して検討した。その結果、低関与群では、音楽を環境音の一部としてとらえたり、好きなコンテンツの要素の一つとしてとらえる傾向があること、中関与群では、気分や感情への影響など、音楽聴取に伴う内面的変化に着目すること、高関与群では、自立したコンテンツとして、音楽を作り手からのメッセージとしてとらえたり、自分の人生において重要な位置に置いたりすることが示唆された。

キーワード：日常的創造性、趣味、音楽への関与度、意味づけ、感情調整

1. はじめに

近年の創造性に関する認知科学的研究での一つのトピックに、一般的な人々が日常的な場面で発揮する創造性がある。こうした日常場面での創造的活動の一つは「趣味」(hobby)である (Silva et al., 2017)。特に音楽鑑賞や楽器演奏など音楽に関わる活動は、さまざまな趣味の中でも最もよく言及されるものの一つであり (北田, 2017)、特に音楽鑑賞は趣味の少ない人が挙げる傾向が強いことが指摘されている (北田, 2017)。また、松田 (2013) によると、大学生の1日の平均音楽聴取時間は2時間44分、最長は12時間にも及び、多くの人々が日常生活の中で頻繁に音楽に接していることがわかる。

一言で「音楽」といっても音楽との関わり方は非常に多様である。人々の音楽との関わり方を分類する試みはこれまでいくつか行われている (Chin & Richards, 2011; 池上他, 2021; Ter Bogt, et al., 2010)。その中でも、池上他(2021)は、音楽聴取の心理的機能に関して、133項目を用い、幅広い年代の916人を対象とする大規模な質問紙調査を行った。彼らは因子分析を通して、音楽聴取の心理的機能に7種の類型(自己認識、感情調節、

コミュニケーション、道具的活用、身体性、社会的距離調節、慰め)があることを見出した。そのうち、第1因子に当たる「自己認識」に最も負荷量の高かった項目は44個にも上り、その内容を見ると「自己認識」のあり方だけでも極めて多様であることが示唆される。

Ter Bogt et al.(2010) は人々の音楽の利用方法のパターン(気分の高揚、ストレスや抑うつ感情への対処、アイデンティティ構築、社会的アイデンティティ構築)と関与の深さに基づく質問項目を用い、オランダ人を対象とする大規模調査(N=997)によって音楽の聞き手を類型化する試みを行った。その結果、高関与群(回答者の約19%)では、他の群と比べて「社会的アイデンティティの構築」以外の項目でも評定値が高いパターンを示した。中関与群(回答者の約74%)は「社会的アイデンティティの構築」以外の項目でややポジティブな評定をしていた。それ以外の低関与群(回答者の約6%)では、「気分の高揚」については中関与群と同程度の得点であったがそれ以外の項目はすべてかなり低い評定得点というパターンになっていた。

このように音楽への関与度によって音楽に対する態度や行動に違いがみられることは示されているものの、こうした違いがどのようにして形成され、維持されるのか、といった個人内のプロセスに関しては、充分検討されているとは言えない。例えば、音楽に関するその人の周辺環境は、音楽への関心を持つきっかけや関心の維持、深化に影響を与えると考えられるが、質問紙調査を中心とする先行研究では必ずしも十分にはとらえられない。また、音楽をどのように使用するか、ということはこれまでの研究でも注目されているが、そうした使用の背景にある、その人の音楽についてのとらえ方についても検討する必要があるだろう。

そこで本研究では、音楽への関与度が様々に異なる若い世代(20歳代前半)の人々を対象とし、音楽と関

わることになったきっかけや、音楽に関する周囲の環境がどのようなものであったか、といった背景から、現在の関わり方までの来歴、音楽についてのとらえ方について、インタビューを通して検討し、音楽への関与とその深化のプロセスを理解するための手がかりを得ることを目的とする。

2. 方法

参加者 音楽への関与度が様々に異なる大学生と社会人10名（年齢：20～22歳）で、第2著者の知人を中心に、スノーボールサンプリングで募集した。

質問項目 インタビューに先立って回答してもらう調査票（オンラインアンケートシステム Qualtrics を使用）では、Ter Bogt et al. (2010) の質問項目を日本語に訳して使用した（表1）。インタビューでは、音楽を始めたきっかけ、周囲の音楽環境、過去から現在までの音楽との関わり、生活の中の音楽の意味づけ、対象者の価値観について問う質問項目を用いた（表2）。

表1 事前質問票の項目（Ter Bogt et al. (2010)に基づく）

質問項目	質問内容
音楽の重要度	
1	常に新しい音楽を探している
2	音楽について他の人たちより詳しいほうだ
3	自分の好みの音楽を友人に勧める
4	音楽なしでは生きられない
気分の高揚	
5	音楽があれば退屈せずに作業できる
6	音楽は退屈を感じさせない
7	音楽は他の人といるときに良い雰囲気を作り出す
8	音楽を聴くとリラックスし、あれこれ考えなくなる
ストレス・抑うつ感情への対処	
9	音楽は人生を乗り切るのに役立つ
10	音楽があれば、一人でいても寂しくなくなる
11	悲しい時はいつも音楽を流している
12	音楽でイライラを発散できる
アイデンティティの構築	
13	好きなアーティストの歌詞と自分を重ねる
14	音楽の歌詞は、しばしば自分の気持ちを表現している
15	好きなアーティストのアイデアは、私にとって魅力的である
16	アーティストは私にとって見習うべき存在である
社会的アイデンティティの構築	
17	自分と友人たちが同じ音楽を聴いていることは重要だと思う
18	自分の好きな音楽が嫌いな人とは友達になれない
19	私の友人は私と同じ音楽の趣味を持っている

全く当てはまらない—完全に当てはまる—の5件法で回答

手続き 参加者に、音楽への関与度を測定する質問項目に回答してもらうこと、音楽との関わり方についてインタビューをするという趣旨や、インタビューの録音、オンラインでのインタビューの場合には録画を

することも伝え、同意してもらえる場合には同意書に署名してもらった。表1の音楽への関与度についての質問項目に回答してもらい、その後、第2著者により表2の質問項目を用いて半構造化面接法を用いてインタビューを実施した。質問順は会話の流れにより適宜入れ替えてすべての項目について尋ねた。対面で実施した場合はボイスレコーダーで録音、Zoomでのインタビューの際には録画も行った。インタビューの時間は1人につき30分から1時間であった。

表2 半構造化面接での質問項目

質問項目	質問内容
1	音楽は好きか
2	音楽をいつ・どのくらいの時間聴くか
3	どんな音楽を聴くか
4	何のために音楽を聴くか
5	好きなアーティスト
6	好きになったきっかけ
7	家族や友人に演奏活動をしている人はいたか
8	今までしてきた習い事・部活
9	音楽の授業の思い出
10	現在の音楽と関わる行動（カラオケやライブ）
11	音楽と主体的に関わった経験があるか
12	質問紙の結果の掘り下げ
13	好きなこと、ハマっていること
14	自身にとって大切なことは何か
15	自身にとって音楽はどういうものか
16	年齢や職業（社会人か学生か）

3. 結果

分析方法

10人の参加者を、事前調査票の合計点と Ter Bogt et al. (2010) による各群のパターン（「はじめに」参照）の両方を考慮した上で、高関与、中関与、低関与の3群に分けた（表3）。

さらに、インタビューで得られた音声データを書き起こし、Steps for Coding and Theorization (SCAT; 大谷, 2008) を用いて分析を行った。個人を特定できる情報（地名、個人名など）は書き起こしの際に匿名化した。

表3 音楽への関与度の各得点と面接対象者の分類

参加者	性別	年齢	職業	音楽の重要度	気分の高揚	ストレスや抑うつ感情の対処	アイデンティティの構築	社会的アイデンティティの構築	合計点	関与度
J	男性	21	社会人	18	19	20	18	9	84	高
A	女性	22	社会人	18	19	17	20	6	80	高
F	女性	22	学生	16	18	18	13	8	73	高
G	女性	22	社会人	14	19	16	19	12	80	中
C	女性	22	学生	12	15	15	18	9	69	中
H	女性	22	社会人	8	13	17	20	7	65	中
E	女性	21	学生	15	19	8	16	6	64	中
B	女性	20	社会人	10	18	11	12	6	57	低
D	男性	22	学生	11	16	11	12	6	56	低
I	女性	21	学生	12	11	6	11	6	46	低

結果と考察

図1に、各参加者を音楽への関与度の順に並べ、面接で得られたそれぞれの対象者の特徴を示した。図1より、音楽への関与度が高くなるにつれて、音楽を重要な存在だと考え、音楽の捉え方も変化し、また音楽への好意の度合いも高まる傾向がみられた。

音楽の捉え方と関与度 低関与群のIさんは、ドラマの主題歌のように、音楽そのものではなくその周りも含めて存在するもの、という認識を持っていた。また、Dさんは音楽を「良い意味の騒音」とであると述べていたことから、音楽を環境音として捉えていたと考えられる。BさんとIさんはドラマ鑑賞やゲームなど、自分の好きなことができない場面で音楽を聴取する、と述べており、音楽を好きなことができない時の代替物と考え、音楽それ自体を自立した鑑賞対象としてはとらえていないことが考えられる。つまり、音楽への関与度が低い人は、音楽を言わば自分とは切り離された外部にある存在だと捉えていると考えられる。

関与度が中程度に上がると、気分調節を主として音楽を聴くようになっていくことが読み取れる。中間群の人は、音楽を聴く際の自分の感情や気分など、自分の内面に着目して音楽を利用していると考えられる。

さらに高関与群になると、音楽には作った人の見聞きしたことや考えが反映されている、と捉えるようになることが示唆された。高関与群の語りを見ると、

絶対に一曲は、どんな時の自分に対しても寄り添ってくれる曲がある。だから、常にその味方でいてくれるもの、自分の味方やね。(Aさん)

頼るべきもの。今自分があるのはすごく音楽があったからだと思うし、吹奏楽やってなかったらこんな人間になってないと思うし。だから俺を支えてくれるものだと思ってる。(Jさん)

など、音楽に対する信頼や感謝の気持ちを持っていることが分かった。このように、音楽への関与度が高い人は曲を1つの世界と捉えていたり、寄り添ってもらったり、頼ったりなど、自分と音楽の双方でのコミュニケーションのような役割を求めていることが考えられる。

このような関与度の違いは、漠然と音楽が自身にとって重要な存在かどうかということだけではなく、自身にとってどのような側面で重要か、音楽に何を求めているのかということが大きく影響していることが考えられる。例えば中間群のEさんは、

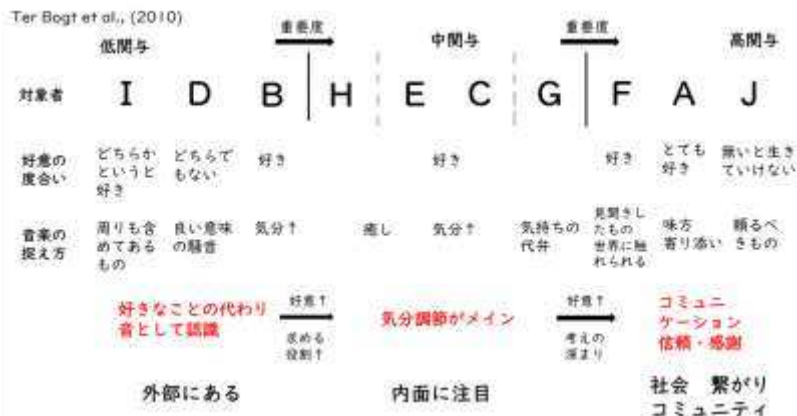
結構私の中では気分と音楽は関係してて、音楽聴くだけで全然1日の気分が変わったり、私はするから (Eさん)

と話しており、音楽聴取が趣味の1つで音楽を重要な存在であると考えてはいるものの、それは自身の気分調節の役割として重要なのであり、高関与群の人のような役割を求めているわけではないことが示唆される。

関与度の深化のきっかけ こうした関与度が深まるきっかけとして、ライブイベントやアイデンティティの形成に関わるような経験やエピソードに音楽が関与することが考えられる。例えば、高関与群のJさんは吹奏楽部の部活推薦試験で高校に入学し、全国規模の大会に出場するなど熱心に活動し、現在の自分があるのは吹奏楽のおかげと感じている。また、AさんとFさんは歌詞に深く共感できる邦ロックのバンドと出会い、ハマったことで音楽への関与も深まっていった。このように、特定のアーティストや楽曲との出会いが、その後のアイデンティティの形成に繋がっていることなどがインタビューで語られることが散見された。

また、そうしたアーティストや曲との出会いには、友人や家族の音楽の好み、幼少期からの音楽聴取環境が影響することが示唆された。吹奏楽部に所属していたJ

図1 インタビュー結果のまとめ



さん、Cさんは吹奏楽曲、Eさんはクラシックを日常的に聴取するなど、音楽に関わる習い事や部活を通して、出会う音楽のジャンルの幅が広がり、聴取する音楽にも影響することが分かった。

演奏経験、音楽の聴取時間との関係 一方、演奏経験や音楽の聴取時間の長さは必ずしも音楽の関与の深まりとは関係がないことが示唆された。演奏経験年数についてみると、高関与群のJさんの楽器演奏の経験年数は6年以上、中関与群のCさんは7年間、低関与群のBさんは6年間と同程度であったものの、関与度は異なっていた。音楽の聴取時間は、音楽を流しっぱなしにすることが多い高関与群のFさん、無音の空間が苦手なため、ながら聴きをする人が多い高関与群のJさんと低関与群のDさんで長くなっていた。つまり、音楽聴取の時間が長いからと言って、必ずしも関与度が高くなるというわけではなく、むしろ音楽聴取時の姿勢が音楽への関与の高まりに影響を与えることが示唆される。このことから、音楽の関与には音楽を利用する頻度や、音楽活動の経験値の多さなどの単純な行動指標だけでは測れない特性があると考えられる。

4. まとめ

この研究では、Ter Bogt et al.(2010)による分類を手掛かりとして、音楽への関与の深さが、音楽に対する捉え方や音楽に関わる行動とどのように関わるのかを、インタビューをもとに検討してきた。

音楽の捉え方と音楽への関与の深さとの関係は、大まかには以下のようにまとめられるかもしれない。低関与群では、音楽は環境音の一部や自分の好きなコンテンツの一側面として、いわば自己の外部にあるものとしてとらえるが、中関与群では、音楽は自分の内面(気分や感情)に変化をもたらすものとして、つまり自分の内面の変化に注目することを通して音楽を捉えるようになる。高関与群では、音楽を単に自己の内面との関わりとしてよりも、作り手からのメッセージや、音楽を通してのアイデンティティ形成、仲間とのつながりなど、コミュニケーションの関与するものとしてとらえるようになる。また、一日当たりの音楽聴取時間や楽器の演奏年数のような音楽に関する行動の単純な指標では、音楽への関与度の違いは現れず、むしろ音楽に対する意義づけ(あるいはその人の生活の中での位置づけ)のような質的側面の違いが音楽への関与の深さと関わっていることが示唆された。

音楽はしばしば言語と同じようなコミュニケーションの媒体というメタファーでとらえられている。しかし、今回の研究結果からは、必ずしもすべての人が音楽をコミュニケーションの媒体としてとらえているのではなく、むしろ関与度の高い人に限られる可能性が示唆される。音楽から何らかの意味を読み取ろうとすること自体が、実は普遍的なものではない、ということかもしれない。また、音楽は実社会の中で頻繁にBGMとして用いられ、メッセージとしての機能を期待されずに使われることが多いことによる影響もあるだろう。

さらに、音楽への関与の深さは、必ずしも音楽演奏の経験歴によって決まるわけでもないことが示唆された。これまで、特に音楽認知の研究において音楽経験の効果をコントロールするために、音楽演奏の経験年数などが指標として用いられることが多かった。この方法では、研究目的によっては十分に音楽に関わる認知処理を統制することができない可能性があるのかもしれない。

文献

- Chin, T.C., & Rickard, N.S.(2011). The Music USE Questionnaire- An Instrument to Measure Engagement In Music- *Music Perception*, 29(4), 429-446.
- 池上真平・佐藤典子・羽藤律・生駒忍・宮澤史穂・小西潤子・星野悦子(2021). 日本人における音楽聴取の心理的機能と個人差 *心理学研究*, 92(4), 237-247.
- 北田暁大(2017). 社会にとって「テイスト」とは何か—ブルデューの遺産をめぐる一考察 北田暁大+解体研(編著) 社会にとって趣味とは何か—文化社会学の方法規準 河出書房新社
- 松田 健(2013). 音楽のデジタル化と音楽聴取形態の変化について—デジタル世代のミュージッキング— *関西外国語大学研究論集*, 97, 181-198.
- 大谷 尚(2008). 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 —着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き— *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要：教育科学*, 54(2), 27-44.
- Silva, P.J., Cotter, K.N., Christensen, A. P. (2017). The creative self in context: Experience sampling and the ecology of everyday creativity. Karwowski, M. & Kaufman, J.C.(Eds.) *The Creative Self*. Academic Press. <http://dx.doi.org/10.1016/B978-0-12-809790-8.00015-7>
- Ter Bogt, T. F. M., Mulder, J., Raaijmakers, Q. A. W., and Gabhainn, S. N. (2010). Moved by music: a typology of music listeners. *Psychology of Music*, 39, 147-163. doi: 10.1177/0305735610370223